

日本大学桜門建築会

2009-December
No.86

桜建会報



工学部・早川君の「大切な歴史を日常の風景へ」



生産工学部・加藤君の「活動のカベと小さなコツ」



理工学部海洋建築工学科・朽木君の「美しいまちをつくる、むらをつくる」



理工学部建築学科・松田さん、原さん、藤井さん、真砂さん、森實さんの「1RK」



<http://www.okenkai.jp/>

contents

特集／日大建築山脈[構造系]

理工・工・生産工学部の山脈図—2

インタビュー1 斎藤公男名誉教授×岡田章教授—4

インタビュー2 福島暁男元教授×櫻田智之教授×小松博准教授—8

研究室紹介—12

事務局だより—14

トピックス／卒業生有志が「吉田鉄郎賞他事業基金」へ寄附—15

学部ニュース—15

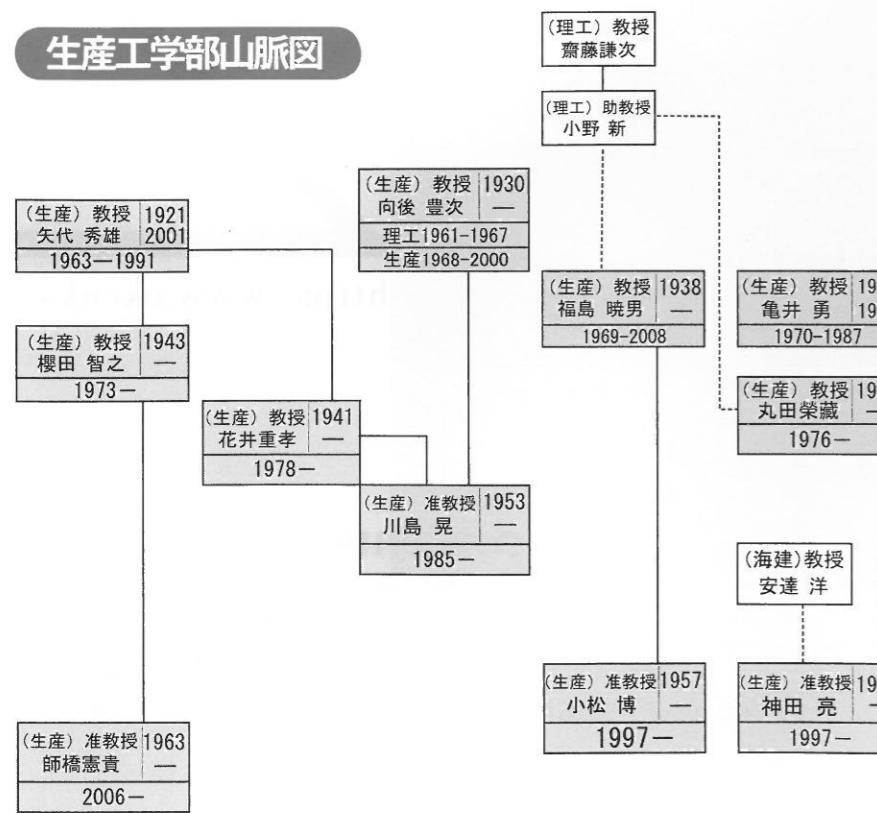
特集 日大建築山脉 [構造系]

来る2010年は理工学部90周年の記念すべき年になりますが、同じ年にできた建築学科も90周年を迎えることになります。ちなみに、桜建会は1922年日本大学高等工学校の第1回の卒業生によってスタートしたので2年後が90周年です。

広報委員会ではこれを契機に「日大建築山脈」を企画しました。数十年前に卒業された会員の皆さまは、現在の教員組織の構成はどうなっているのか、また卒業したての皆さまにはご指導いただいた先生や研究室のルーツがどこにあるのか、知っておきたいのではないかと考えたからです。

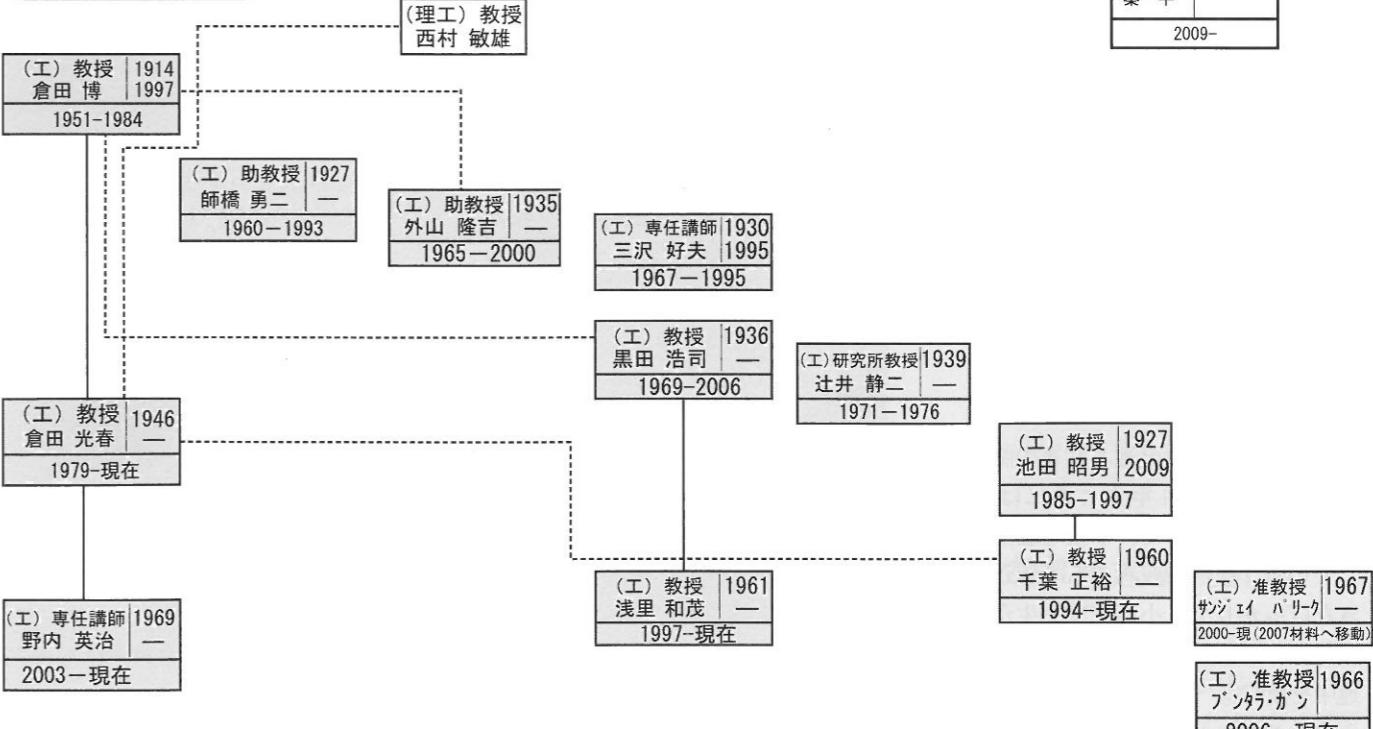
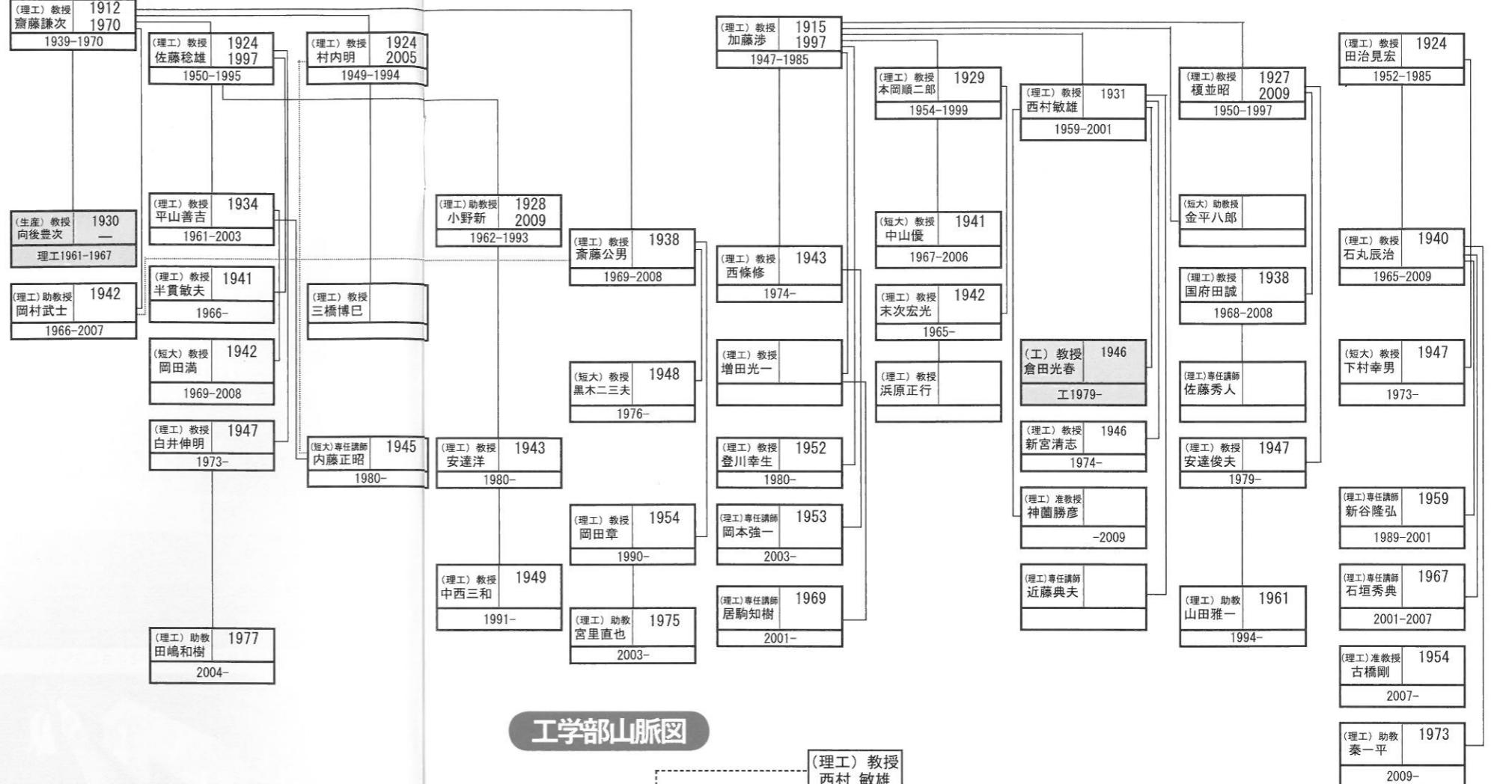
そのための人的(教員)な建築山脈をつくってみました。すべての教員を対象にするとその広がりは膨大になりますので、本号の構造系を初めとして、都市計画系、環境系、材料施工系、歴史系そして計画・デザイン系の各系に分けてまとめる予定です。加えて、各系の重鎮の先生方にインタビューを行い、日大建築系学科の社会に果たした役割、想い出、後輩への叱咤激励などをお聞きいたします。OB・OGの皆さんには当時を懐かしみつつ、今後の発展のステップになれば幸いです。

本企画は2011年3月までの連載を予定しております。今回、かなり注意深く作業を行いましたが、漏れがあったり、不適切な表記があるかもしれません。その際にはご容赦いただくとともに、広報委員や事務局までご一報ください。今回の山脈図を第一步として、2年後の桜建会90周年には完成形に近いものを提示できればと思っております。皆さんには、ぜひともご協力いただきたくお願い申し上げます。(横内憲久／広報委員会委員長)



最終(現)職 氏名	生年 没年	線種	系列
着任--退職 (講師以上の資格で)		-----	修論又は卒論

- 山脈図作成にあたって・教員は基本的に専任講師および助教以上の記載
- ・線で結ばれている教員間は卒研および修士・博士論文等の指導関係等
- ・日大出身で他大学等の教員は除く
- ・誕生年、教員年の空欄は本人の希望および不明



「構造の日大」で過ごした歳月

斎藤公男名誉教授×岡田章教授

建築構造家の佐野利器先生が1920年に建築学科を創設した日本大学は、いつからか「構造の日大」とよばれた。高度成長期に入り、東京はアジア初のオリンピック開催地として都市のインフラが整備され、大型構造物が新しい景観を形成していった。そんな時代の流れの中で、建築は規模、形態とともに大きな変貌を遂げていく。こうしたエネルギーに満ちた時代に触れ、先駆者たちの仕事を身近に接した理工学部の斎藤公男名誉教授に、現役の岡田章教授が当時の社会や学内の雰囲気、研究のこと、今のことなどを聞いた。



本年9月8日、理工学部駿河台校舎の空間構造デザイン研究室にて

迷いに迷った卒研研究室

岡田○斎藤先生がつくってきたユニークな構造分野は、偶然にできたわけじゃない。先生を日大のこの場所へ呼んだ人がいるわけです。その辺が非常に面白いところだと思うので、そこから話を始めましょう。斎藤謙次先生に呼ばれたって聞いていますが。

斎藤○まず、卒研を選ぶときの話をします。僕らが4年のときには60年安保闘争があって、学校も騒然としていた。駿河台校舎の5号館ができたばかりで、小林文次先生が先頭に立って学生運動をしている代表連中を研究室へ呼んで、「大学をやめるつもりか」とたしなめていたこと

を思いだします。当時の日大は超保守的でたいへんな時代だった。

4年で卒研を決める時は、あちこちの研究室を回った。市川清志先生、宮川英二先生、榎並昭先生など、3年最後の1カ月間は研究室を転々としながら、迷いに迷つてなかなか決められなかった。どの研究室もみんな面白そうだったんだ。最終的に決まったのが5月の初めで、全学生の中で一番最後。僕はそんな迷い羊だった。入ったのは、当時非常勤務講師で建築学科に来られていた東大の坪井善勝先生の研究室。卒業研究と大学院修士2年は坪井研究室で、3年間微分積分ばかりやっていた。

岡田○卒業研究と修論が坪井善勝先生のところだったんですね。そのころは東京オリンピックの前で、復興

景気がたいへん盛り上がっていた。代々木のオリンピック競技場を建てている時もある。当時、丹下健三という巨星がいて、この時代のメルクマールとなるような建物の構造のバックアップをしていたのは坪井先生だった。そこに斎藤先生がたまたま居合わせていたんですね。

斎藤○坪井先生は、本当に数学の達人でね。コンピューターがない時代だから、複雑で膨大な数理問題に日々立ち向っていた。代々木のオリンピック競技場をはじめとして、とにかく丹下氏が一番活躍した時代ですから、新しい技術をどんどん使っては斬新な建物を建てていった。当時は、ふつうの設計事務所やゼネコンはあまり力がなくて、ほとんど坪井研究室で、構造の設計をしてい

た。僕の感覚で言えば研究も世界一だし、設計も世界一だというような研究室だった。ぜんぜん僕なんかが追いつかないような数学の天才ばかり揃っているから「俺はだめだ」と思い悩んだんだ。

岡田○院の後就職を考えたんですね。斎藤○方向がなかなかみえなくてね。「現場にいこうかなー」って、思っていた。坪井先生に相談したら、斎藤謙次先生に電話してくれて、「ケンチャン、ひとりちょっと訳わかんないのがいるの。面倒みてやってよ」と。そうしたらその場で「あー、いいですよ」って。斎藤（謙）先生は、その時理工学部の次長くらいですかね。54、5歳かな。この年の4月に坪井研から日大に行くことになった。

岡田○すぐ助手になったわけじゃないのですか。

斎藤○助手は2年過ぎてから。でも、助手をしたのは3年ぐらいだった。岡田○私が、小嶋勝衛先生から聞いた話では、斎藤先生は当時デザインもピカ一で、誰もかなわなかつたということです。研究室を決めるのに時間がかかったのは、結局、才能がありすぎて、迷ったんではないですか。

斎藤○いや、中途半端なんだよ。

多彩な先生方の思い出

斎藤○日大に来て、よかったと思うのは斎藤謙次先生の研究を間近でみられたこと。先生は、力学の日本の権威者でスマートな研究センスをもった人でした。

それと同時に、当時の大学の先生はみんな実際の設計をしていた。研究と同時に、そういう実際の社会とのつながりをもっていた。理工学部5号館の設計とかも、みんなでやっていたし。坪井研究室の設計とはぜんぜん違うんだけど、振り返ってみると、そういう雰囲気がすごくよかったです。

岡田○印象的な先生はいましたか。

斎藤○残念なことに小野薰先生はもういなかった。小野新先生のお父さん。絵がすごくうまくて、プロ級だった。伊藤喜三郎氏と並ぶくらいの達人なんです。以前の桜建会報にも出ていたんだが、1940年卒の梶川和男氏が思い出として小野薰先生は「これからデザインを専攻する者でも、構造理論はもちろん、設計もできなくては新しいデザインを生み出すことはできない」って言ったと

いう。
岡田○すごいことを言ってましたよね。

斎藤○そうなんだよ。当時の先生は実学もやっていたし、教育もする。加藤涉先生も自分の事務所をもっていた。もちろん、表立って名前を公表していたわけではないが、小林美夫先生がデザインして、加藤先生が構造設計なんていいうのがけっこうあった。このころの加藤先生の事務所は飛ぶ鳥を落とす勢いで、所員が100名くらい。すばらしいシェル理論を提唱し、先端的なデザインをつくっていました。日大にはもともと、そういう構造デザインのDNAがあつたんだと思う。

岡田○大手事務所並の規模ですね。

斎藤○時代は急速に動いていて、研究も専門分野に分かれています。加藤先生はコンクリートのシェル構造をやって、その下に榎並昭先生がいたが、その内方向転換しましたね。僕が先生にあいさつしてもらったのは、五十歳過ぎてから。とにかく恐い存在ですね。

岡田○そうですね、私も榎並先生や西村先生は恐かったです。

斎藤○それで榎並先生は地盤を専門にして、本岡順二郎先生はプレキャスト・コンクリート、西村先生だけだね、ずっとシェル理論を追究していました。

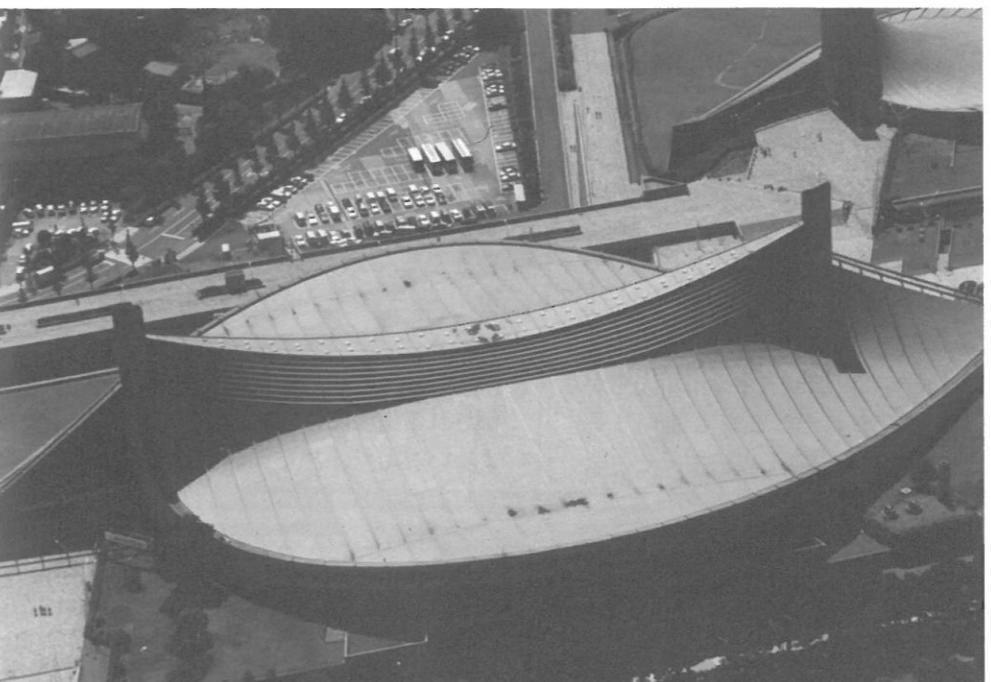
岡田○RCシェルをやりながら、海洋建築の方に展開していくのは西村先生ですね。先生は、数学理論を実物に当てはめるときに、どうモデル化するかということが好きなんだと思ったことがあります。

斎藤○宮川先生と設計した新潟のHPシェルの体育館は、傑作だ。

岡田○加藤先生の事務所も一緒にやっていたこともありましたよね。

開かれた大学の研究

斎藤○今のように産学共同なんかない時代だからね。人材が少なくて研



1964年竣工の代々木オリンピック・プールは、半剛性吊屋根構造による魅力的なシルエットが特徴。（撮影／斎藤公男）

究しているのは大学しかなかったから、相当外にも開かれていた。でもそういう雰囲気は急速に萎んでいった。坪井研究室にいたときに、印象に残っているのは、「田治見先生と榎並先生は日大の宝だ。こういう人がいるから、日大はやっていける」と坪井先生がいったこと。僕は、田治見宏先生に「もっと勉強しろよ」といつも言われていた。田治見先生は振動工学が専門だったが、実際の建物の設計がとても好きで、岩手のケーブルネットや茨城の笠松体育馆も一緒に実験をやった。

岡田○学内だけでなく、本当に実社会に開かれていた・・・。

斎藤○日大にもどって何年くらいかな、雰囲気が変わるのは。斎藤謙次先生が亡くなつて、加藤先生の時代になって、それから数年くらい経つと、そういう開かれた感じがなくなった。

岡田○ちょうど、私が大学にいたころじゃないですか。佐藤稔雄先生に呼ばれて、なにやってるんだと聞かれて、「力と形」と答えたら、「バカモノ」と言われました。研究とは認められてなかつたんですよね。私の卒業が1977年だから、75年頃かな。斎藤○僕が、ドクターを取得したの



日本大学理工学部船橋校舎・ファラデーホール天井を飾る放射状の張弦梁。1978年竣工

は50歳。それまで、書ける雰囲気もなかつたし、半ば諦めていた。しかし坪井研があったおかげで、国際会議には年中行っていたし、外部の人たちといろいろ交流があつて、認められなくてもいいと少し僻んでたんだ。そうしたら東大から日大に来られた岸谷孝一先生に「それではだめだ」と言わされた。そうだな、ドクターを取らなきゃ後輩が育つわけないと思つて、論文を半年で仕上げて教授になった。35、6歳から50歳くらいまでは助教授で、けっこう勝手にやれた良い時代だった。

は早稲田、構造は日大だというけれど、構造一辺倒でなかつたから、かなり創造的にできたのかもしれないですね。

斎藤○日大の構造は、斎藤謙次先生の構造力学が一番の根幹であるよう気がする。しっかり力学を抑えておいて、その下に専門分野をつくっていく。やっぱり力学というのは、建築教育の中のひとつの核です。僕らはその力学があるがゆえに構造デザインという分野で戦えるわけです。それで、この研究領域の先頭に岡田君がいるんだ。

岡田○そうですね。

斎藤○こうした力学の系譜は、外から見たときに際立つ特徴といえる。ほかの大学にはない、世界でもたぶん珍しいのではないか。こういう建築人が日大にいるということを、もっとPRしたほうがいいと思っている。

岡田○日大には、その道のプロに評価される先生はいっぱいいるんですよ。いるんだけど、学内では自分から言いづらい。外から入る情報に驚いて納得するのではなく、そういう評価を学内でも共有できるといいでね。

一体感のあった建築教室

斎藤○斎藤謙次先生は次長になって4年ぐらいで亡くなるんです。57、8歳くらいでした。その後70年の闘争があつて、加藤先生や市川先生が主任になられた。とても強いリーダーシップを發揮していて、その頃は建築教室に一体感がありました。そんな一体感が、よくわからないのだけど、少し変質したように思う。

岡田○70年代前後ですね。一番活気のあった時代。学生のとき、構造はもちろん、いわゆる建築デザインも含めて先端的だった。よくデザイン

この山脈図を見ていると加藤先生は、いろいろなところに枝が伸びている。それが今も生きていて財産に



Okada Akira 1954年徳島県生まれ。77年日本大学理工学部建築学科卒業後、竹中工務店技術研究所に入社。90年大学にもどり、2007年同大教授。工学博士。97年 Tsuboi Award、2005年JSCA第16回作品賞、06年 Aluprogetto(国際アルミニウム構造コンテスト)最優秀賞、2007年日本建築学会教育賞を受賞。著書に「ケーブル構造設計指針・同構造」「柱のない空間」など。

なっている。いろいろな分野に広げてゆくという、すごい方だったんですね。私が学生のとき加藤先生は「これからは海洋と砂漠だ」って大学院生に説いたんです。学生たちはみなポカーンとして聞いていたけど、あれは本当に強烈だった。それが海洋建築工学科創設につながったわけでしょう。

斎藤○あのパワーはすごいよね。なかなかできない。ほかの大学でも聞いたことがない。もっと評価してもいいことだと思うね。

建築教育の可能性

斎藤○僕は大学に入る前、弁護士とか、貿易商とかになろうと思っていた。どちらかというと文系ですね。絵も好きだった。好きだけど、才能はそんなにない。頭はよくないんだけど、コツコツやるのは好き。それで理系もいいかなと思った。理系と文系、両方できるのが、建築だと思って勉強することにした。

昔からものをつくりたりするのが



上／木造アーチとスリングでつくられる出雲ドームの立体張弦アーチ構造。デザインのイメージは「蛇の目傘」。1992年竣工。右／20分の1の実験模型。構造システムやディテール、施工法などの多様な検証が行われた



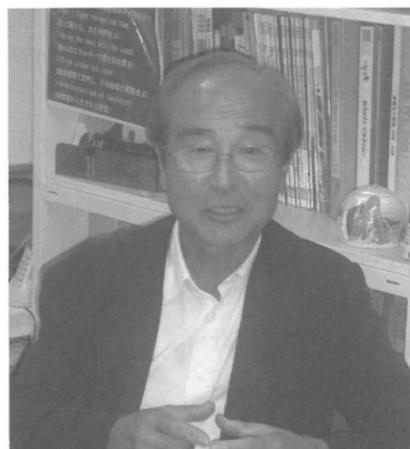
もって、ある答えにもっていくわけでしょう。いろいろな考えがあるのに、答えがひとつしかなければ、大学の先生はいらないんじゃないかなと思つたりします。しかし今は、再び大学の役割が見直されてきて、又相談・依頼が来るようになつた。今は、そういう面白い時代なんですね。

最後に、読者の方へエールを送つてください。

斎藤○若い人には、外に向かう意識を強くもってほしい。かつて日大が建築界をリードしていたという本来のDNAがあるわけですから、臆せず闘つてほしい。それに人数が多いっていうことは、いろんな面白い人がいるってこと。フラットにならないで、自分がやりたことを人に気にせず飛び出してほしく。そうすれば、応援する人はいっぱいいるはずですよ。

僕はたまたま名誉教授という称号をもらえ、少し時間もできたから、これからはがんばっている人たちのバックアップをしていきたいと思っている。

岡田○それは、心強い。この度は本当にありがとうございました。



Saitoh Masao 1938年群馬県生まれ。61年日本大学理工学部建築学科卒業。同大名誉教授。工学博士。2007年から09年まで日本建築学会会長。86年日本建築学会賞、93年松井源吾賞、97年 Tsuboi Award、06年 Aluprogetto(国際アルミニウム構造コンテスト)最優秀賞、07年日本建築学会教育賞、09年 E・トロハ賞(IASS)を受賞。著書に「空間構造物語」など。

インタビュー2 激動の時代を超えて

福島暁男元教授×櫻田智之教授×小松博准教授

1952年、理工学部から分かれた生産工学部は、その5年後、習志野の地にキャンパスを置いた。草創期の建築工学科の授業の多くは理工学部の先生方が兼任され、専任の先生は数えるほどしかいなかったという。そんな中で、非常勤の先生や研究室をもたなかつた先生が、構造分野の教育に尽力された。できたばかりの生産工学部に着任した福島暁男元教授、学生時代からずっと習志野だったという櫻田智之教授に、小松博准教授が、当時の先生方の教育に対する姿勢やキャンパスの雰囲気などを聞いた。



本年10月14日、生産工学部津田沼校舎5号館のゼミ室にて

生産工学部の始まり

小松○本日は日大建築山脈の中の生産工学部の構造系の流れをみるとということで、福島暁男先生と櫻田智之先生においでいただきました。

生産工学部は理工学部から分かれ、1952年に日本大学で工学部工業経営学科を新設したことが起源となっています。この年を生産工学部のスタートとしています。その後、千葉県習志野市のこの地に移転し、61年に工学部を理工学部に名称変更。同年、工業経営学科は経営工学科と改称しました。櫻田先生は62年に理工学部の経営工学科の建築専攻に入学し、ずっと津田沼キャンパスで過ごされました。学部卒業後は大学院に進み、68年に助手になられました。

福島先生は59年に理工学部の二部に入学し、63年卒業後は東京大学の生産技術研究所に入られて、その後専任講師として、69年に生産工学部にいらした。生産工学部という名称になったのは、66年でした。

櫻田○紛争はその年か次の年あたりだったでしょうか。

小松○70年が安保闘争の年ですね。櫻田○ちょうど助手の頃でしたね。

福島○紛争は終わっていたよね。

櫻田○そうだね。終わっていた。生産工学部は、わりと早い頃から紛争があって、東京や大阪が大騒ぎしていた頃は、もう終わっていたんです。福島○私は69年に来ましたが、すでに紛争は終わっていて、人が足らなくて呼ばれたんです。ですから、ここで学園紛争をしていたことを私は知らないですね。

小松○櫻田先生が勤め始めた頃がいちばん酷かったんですか。

櫻田○68年4月の時点では、まだ何も起こっていなかった。助手になった時はまだ静かでした。スタートは夏です。

小松○千葉から始まって東京に飛び火した、と聞いたことがあります。

福島○僕が来た頃、学内はガタガタしてましたけど、紛争は終わっていてちゃんと授業はしていました。

櫻田○日大紛争では、大学本部の問題があつて週刊誌でたたかれていた。一番びっくりしたのは、ある日突然という感じで始まったことです。前の日まで普通に授業をしていたのに、次の日にバリケードが築かれていた。うちの研究室のゼミ生もその中にいるんです。20人くらい。僕は呆気にとられました。

騒ぎがあるということを報道では聞いていたけど、まさか自分のところであるとは夢にも思わなかった。

小松○昨日まで、そぶりもなかった

んですね。

櫻田○でもそれは政治闘争というのではなくて、日大の学内の問題に対するものでした。

小松○その時福島先生は、東京大学だったんですよね。

福島○本郷の方は知らないですね。僕が行っていた生産技術研究所(生研)は防衛庁が目の前でしたから、こっちはすごかったです。学生が防衛庁に集まつてね。そしたら警官に追われる。すると学生は生研へ逃げるんです。ところが警官は学校の敷地へは入れないわけです。

小松○日大闘争とは違うんですね。

福島○ええ。

櫻田○生研の方は革マル派とか、いろんなセクトが入り乱れていますよね。こちらは学内の問題なので、政治的な背景がまったくない学生なんです。

福島○だから早く収束したのかな。

櫻田○かも知れませんね。

小松○どのくらい続きましたか。

櫻田○紛争には4年生もいたので、授業ができなくて卒業はどうするんだということになった。だから1年は続かなかつたんじゃないでしょうか。もう今はいいけど旧両国国技館(日大講堂)で1週間くらいかけて集中講義をやって、それで4年生は何か卒業できたのです。

小松○生産工学部の歴史として、理工から分かれた後の最初の大きな出来事として大学紛争があったということですね。

専任講師が3人の時代

小松○ここから本題です。日大建築山脈の中の生産工学部の構造というテーマで、まずは福島先生から伺います。理工学部での卒研は小野新先生のところでした。

福島○僕は昼間は東大の生研にいたので、そこでやっていたことを卒論のテーマにしたいと思っていました。当時指導を受けていた田中尚

福島○寺崎恒正先生はいましたか。櫻田○いや寺崎先生には習っていないんじゃないかな。専任ではなかったですよ。

小松○理工学部との兼担も多かったんですか。

櫻田○寺崎先生はハワイ大学の教授をしていました。特別講義という形で講義していたのではないでしょか。毎日大学にいたという記憶はないですね。

福島○授業を担当していたのは構造力学ですか。

櫻田○構造力学は佐藤稔雄先生と本岡順二郎先生でした。

福島○そうそう、本岡先生は鉄筋コンクリート構造でした。それから平山善吉先生が助手をしていて、佐藤先生の代わりによく講義に来ていました。まだ向後豊次先生が生産工学部へ来られる前です。

小松○卒業生の所属研究室に、山脈図がない田中先生の名前がよくできますよね。

福島○ある時期、矢代先生経由で何人か田中研に卒研の面倒をみもらったことがあって、3年くらい続きました。

櫻田○私の同級生も、田中研が5~6人いましたよ。生産工学部の構造は矢代研から始まったようだけど、一番長いのは田中先生なんです。

福島○そうですよね。

櫻田○山脈図にはありませんが、誰よりも前からここにいらした。

先生は東大の先生なので、そこでは卒業できないんです。それで田中先生と親しい小野新先生のところに行き、田中先生のところで卒業研究をしたいと話しました。そうしたら、小野先生が了解してくださいました。だから本当に指導してもらったのは小野先生ではないんです。

小松○その頃、どんな先生がいましたか。

福島○僕は理工二部でしたが、直接教えていただいたのは多治見宏先生、斎藤謙次先生の直弟子の佐藤稔雄先生、村内明先生がいました。

櫻田○僕の師匠の矢代秀雄先生は、日大を卒業後、東大の生研で坪井善勝先生の助手をしていました。

福島○理工学部の斎藤公男先生も坪井研究室にいました。そこでつながりますね。

櫻田○田中先生も坪井研究室にいました。それで、おそらくなんですが、矢代先生は生産工学部を充実させるために、東大助手のころに呼ばれたのではないかでしょうか。矢代先生が講師として生産工学部に来た時、僕は学部の2年生でした。3年生以降ずっと矢代先生の元にいました。

小松○矢代先生は若い頃に生産工学部へ単身でやってきました。授業を受けたんですね。

櫻田○若いと言っても、40歳半ばくらいでしたか。最初の頃は専任の先生が極めて少なかったんです。専任で記憶にあるのは矢代先生、計画系では小島重次先生、他に細谷隆二先生。構造系では矢代先生だけ。



1967年頃の生産工学部構造実験施設。右から3人目が助手時代の櫻田先生。ゼミ生の人たちとともに



Sakurada Tomoyuki 1943年東京都生まれ。66年日本大学理工学部経営工学科卒業、同年大学院に入り68年修了し、その後矢代研究室の助手になり、専任講師、助教授を経て97年より教授。博士（工学）。専門は鉄筋コンクリート構造。現在は、「再生骨材とごみ溶融スラグを利用したリサイクルコンクリート」の研究に取り組んでいる。

一番長く関わった田中先生

福島○田中先生は、生産工学部では非常勤の講師という立場でした。

小松○どんな授業でしたか。

櫻田○田中先生はとても頭の切れる先生で、建築というよりは数学の先生という感じでした。当時先生の近くに住んでいた私は、毎週先生の送り迎えをしていました。

小松○へえ～。

櫻田○ですから、たまに手紙を出すよう託されるんです。それが、同じ研究をされている方や建築学会への質問状だったりする。研究に対する姿勢はたいへん厳しいと思ったものです。でも、私は怒られたことはないし、よくお酒に付き合ったりと、とてもよくしていただきました。

福島○お酒は好きでしたね。

櫻田○授業は鉄骨構造でした。ただ学生には難しくてさっぱり理解できない。それである時先生に聞いたんです。「学生は解ってないようですが、こういうやり方でいいんですか」と。

そうしたら「100人のうち4～5人が目を輝かせている学生がいる。だからそれでいいんだよ」と答えてくれました。教育に対する姿勢として

スゴイなあと思いました。そういうやり方で優秀な学生を多く輩出し、今はいろいろな大学に散らばっているんです。

福島○田中先生は東大を60歳で辞めて、千葉大へ行き65歳で定年。それから生産工学部に総合科学研究所の教授として70歳までいらっしゃいました。

小松○ちょっと話は変わりますが、現在われわれは建築応用力学という授業をしていますが、先生方が学生の時もありましたか。

福島○いや僕が来たときは変則的でした。建築材料1、2があって、2の中で応用力学、いわゆる材料力学をやりました。

小松○今使っている教科書は相当古いので、先生方も使っていたんじゃないかなと思って・・・。力学を教えていた先生はどなたでしたか。

櫻田○大学院の時は斎藤先生や加藤涉先生に教えてもらったけど、両先生とも大御所でしたから、津田沼までは来ませんでした。若手の西村敏雄先生や村内明先生がこちらへ来ました。

福島○1学年400人というけど、落ちた学生もいるので400人じゃきかない。大きな講堂でマイクを使ってやりました。僕も若かったから、騒いで態度の悪い学生には学生証を取

細谷先生の3人ぐらいしか専任はないなかった。想像ですけど、生産工学部が独立して少し経って大学院を立ち上げましたから、自前の先生が必要だったという事情があったんだと思います。

福島○僕の場合は材料力学を教える先生がいなかったので、こちらへきました。29歳の時で、当時は学位もなくてピンチヒッター的な感じでしたよ。

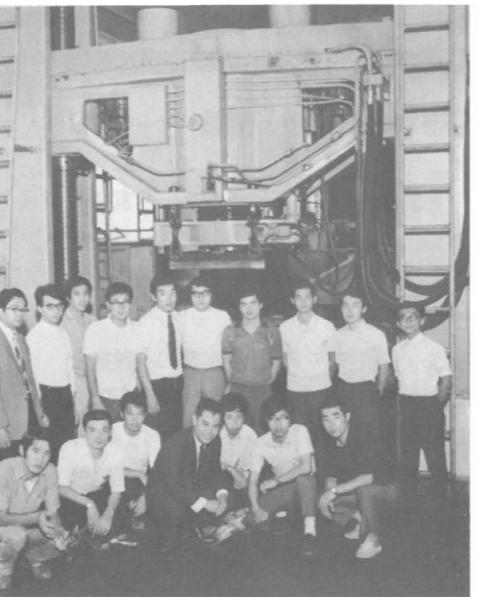
小松○櫻田先生も30歳くらいで研究室をもったんですね。

櫻田○講師になったのは、ちょうどその頃ですね。

小松○僕は77年に入学しましたが、当時は1学年で370～380人近くの学生がいました。でも先輩方はもつといたと聞いています。先生は400人の学生に教えていたわけですが、たいてんだったのではないかと。

櫻田○いっぺんに400人に講義するわけではないけど、1クラス200人はいました。

福島○1学年400人というけど、落ちた学生もいるので400人じゃきかない。大きな講堂でマイクを使ってやりました。僕も若かったから、騒いで態度の悪い学生には学生証を取



1972年頃の11号館の実験施設。福島先生ほか、15名のゼミ生が実験に参加した。前列右から4番目が福島先生

目前の体制が整った頃



Fukushima Akio 1938年東京都生まれ。63年日本大学理工学部卒業。66年東京大学生産技術研究所助手、69年より日本大学生産工学部の専任講師となり、助教授を経て90年から教授。2008年に退職した。工学博士。専門は鉄骨構造。著書には「基礎からの鉄骨構造」(森北出版共著)などがある。

こなしていた。自分の時間なんかないほど忙しかったんですが、辛いとは思わなかった。国そのものが大きなエネルギーのまっただ中にいたという感じでした。

小松○学内だけでなく、商店街も活がありました。今は寂しいですよ。

生産工学部学生の気質

小松○長年先生をしてきて、印象に残る学生はいましたか。

櫻田○昔は1学年300～400人くらいいましたから玉石混交で、いろんなタイプがいましたね。僕も若かったから、よく一緒に実験をしたり、遊んだりしました。

福島○僕が感心しているのは、年1回くらい開催している研究室のOB会によく来てくれること。一人ひとりにそれぞれの活躍を聞くのが楽しみのひとつになっています。

櫻田○生産の卒業生に限らないのですが、企業や研究所などへ行くと、必ず「私も日大です」といつくる人がいる。「〇〇先生のところにいました」なんて話してくれます。よくあるんですね、こういうことが。理工も生産も工も、全部「日大の建築」でつながっていると感じます。そういうベースがあるんですね。

福島○でも生産工学部の学生気質でいうと、わりとのんびりしているよね。今は変わりましたか。

小松○いや～、リクルーターからも同じことを言われますから、変わっていないですね。

櫻田○教育という面では、研究・実験設備が充実しているので、手足や体力を使う実証的な勉強がやりやすい。都心の大学と比べて恵まれているが、学生にはそういう特色がなかなかわからないよね。

小松○学生諸君は自分がいかにすごい装置を使っていたかということを、社会に出てから気づいたと言いますよ。

櫻田○それが生産工学部の個性のひ

とつななのでしょう。

小松○授業でもわりと実験が多いように思います。「構造」という研究分野でよく手を動かしている。

櫻田○そうですよね。講義で教えてもらった理論を体験的に検証できる。そういう機会のある大学もそう多くないのでしょうか。

小松○最後に、OBや学生に向けて、ひと言ずつメッセージを。

福島○建築に情熱をもち続けて欲しいですね。意に染まない就職でも5年10年やれば、おもしろい部分をみつけたり、やりがいもできます。途中でマイナス思考になるようなことは良くないので、前向きな姿勢で人生を全うしてほしい。

櫻田○人生、自分の思うようにはいかないものです。困ったときは仲間がいっぱいいると思ってください。同級生や先輩、後輩、みんなの知恵を借りて道を切り拓いてほしいですね。日大の良さは必ずあるので、ぜひ頭の片隅において仕事をしてください。

小松○ありがとうございました。



Komatsu Hiroshi 1957年愛知県生まれ。83年日本大学生産工学部卒業、87年福島研究室の助手になり、2005年より准教授。博士（工学）。専門は鉄骨構造。現在、「通信鉄塔等山形鋼主柱材の簡易組立方式による座屈補剛」の研究に取り組む。

研究テーマ 景観からのまちづくり

研究室名	坪井研究室
教員名	教授・坪井善道
キーワード	都市計画／まちづくり／景観／都市空間像／環境共生／制度
企業等への要望	<input checked="" type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input checked="" type="checkbox"/> 計画・設計等の協力 <input type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input type="checkbox"/> その他()

研究概要

研究室は1976年12月に開設しました。現在スタッフは坪井と大学院生ですが、助手として在職していた廣田篤彦君は日大で学位を取得した後、日本文理大学に奉職し現在准教授として教育・研究に携わっています。坪井が丹下健三・都市建築研究所（URTEC）に約10年間在職し、建築デザインおよび都市デザインの実務を経験していましたことから、都市と建築の中間領域の計画に興味があり、主に地区レベルの計画・設計および制度に関わる研究を行っています。

研究成果は学会誌掲載および学会発表などで行ってきました。また、具体的な地区空間像の提案をすることが重要であるという実践活動として、都市計画・まちづくりに関わる自治体の委員会、および競技設計等を通じて受賞作品を含め提案してきました。特にわが国の現代都市景観に魅力が欠けること、かつ美しくないことから、できるだけ具体的な都市空間像をもって提案することを心がけています。欧米型都市計画に追随していくのではなく、環境共生時代にふさわしいという条件を備え、日本を初めアジア固有の生活文化に根ざした都市計画・まちづくりの手法についても、これから的重要研究テーマとしてとらえております。先ず、タイ・バンコクの街路空間の調査・分析結果をまとめ、学会誌に掲載されることになりました。



まちづくりの提案事例模型写真・透視図

連絡先◎日本大学生産工学部建築工学科 4号館4階 tel.047-474-2505 fax.047-474-2504 E-mail tsuboi.yoshimichi@nihon-u.ac.jp

研究テーマ 建築人間工学とインテリアデザインに関する人間環境系の研究

—身体周囲に必要なアキ寸法の計測と体系化に関する研究—

研究室名	人間環境デザイン研究室（若井研究室）
教員名	教授・若井 正一
キーワード	建築人間工学／インテリアデザイン／人間環境／人体動作／アキ寸法
企業等への要望	<input checked="" type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input checked="" type="checkbox"/> 実作・試作等の協力 <input type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input type="checkbox"/> その他()

研究概要

本研究室では、建築人間工学やインテリアデザインに関する人間環境系の研究を行っています。

最近の研究では、多様な生活場面における人体動作寸法を三次元計測して、身体周囲に必要な対人・対物のアキ寸法を体系化することに取り組んでいます。これまで行ってきた主な研究には、階段や坂道の昇降動作に関する実験的研究、食卓まわりの家族の居場所に関する研究、児童生徒の体位の変容と学校用家具に関する研究、オフィスの執務者と座席配置に関する研究などがあります。それらの成果は、日本建築学会、日本インテリア学会、日本人間工学会などにおいて発表してきましたが、具体的な人体計測値や動作寸法などは、日本建築学会編の「建築設計資料集成・人間編」（丸善刊、2003年）などに掲載されています。また、本研究室には、国内外で活躍する建築家や実務家が非常勤講師として所属しており、院生や卒研生に熱い刺激を与えています。

連絡先◎日本大学工学部建築学科 45号館3階 tel.024-956-8750 E-mail 若井 wakai@arch.cen.nihon-u.ac.jp

研究テーマ 建築・都市における緑を中心とした環境計画と手法

研究室名	山崎研究室
教員名	助教・山崎誠子
キーワード	ランドスケープデザイン／造園設計／都市緑地計画／都市景観／環境設計／ガーデンデザイン
企業等への要望	<input checked="" type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input type="checkbox"/> 実作・試作等の協力 <input checked="" type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input type="checkbox"/> その他()

研究概要

本研究室では、建築・都市と緑地等の自然環境のつながりを計画、整備していくことが研究対象です。京都議定書以降、地球環境に関する取り組みや法制度が次々に行われ、また景観法等の整備に見られるように景観に関する取り組みもますます盛んになり、建築単体や都市が周辺および地域・地区の環境についてデリケートに扱わなければいけない状況です。実際、屋上緑化や壁面緑化を積極的に推進してすでに10年は経ちますが、果たしてその効果が現れているかという問題とともに、施工方法や計画の進め方が改めて問われている状況です。単純に緑地や水辺をつくればその成果があるということではなく、効果的な手法の実証と研究を行っていきます。また、山崎が港区・市川市・さいたま市・千葉市の景観に関する委員会の委員であることから、都市における環境に配慮した緑地空間の整備手法や、既存市街地の景観の整備や活性化について、自治体と共同研究を行っています。

連絡先◎日本大学理工学部建築学科駿河台校舎5号館8階 03-3259-0407 E-mail 山崎 yamazaki@arch.cst.nihon-u.ac.jp



十日町芋川集落自然環境マップ作成ワークショップ(2009年8月)



研究テーマ 海洋建築物の構造計画・解析・設計手法に関する研究

研究室のシンボルマーク



研究室名	西條研究室
教員名	教授・西條 修
キーワード	海洋建築構造物／構造解析／流体解析／流体・構造系相互効果問題／実存海洋構造物の構造特性調査
企業等への要望	<input checked="" type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input checked="" type="checkbox"/> 実作・試作等の協力 <input checked="" type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input type="checkbox"/> その他()

研究概要

私の研究室では、「海洋空間に建設される建築物が波浪などの海洋環境下でどのような運動をするか、構造上の安全性は確保されるのか」、すなわち人が生活するための安全性と居住環境の快適性を追求してきました。研究開始当時は海水に囲まれた海洋建築構造物には、流体・構造系相互効果問題とした運動解析が必要と考えました。解析手法は3次元境界値問題に原点を置く、境界積分方程式法（BIEM）による解析が主となります。BIEMの離散化（実際に数値計算する方法）には特異性があって、回避のための理論解析と計算技術が要求されます。成果として海中展望塔や箱型浮体の基盤の設計に対して必要な流体係数付加質量などの簡易算定式の提案を行うことができました。

最近これまでの研究成果を援用し、実際の構造設計に役立てができるようその応用を試みています。また、1988年から現在まで、建築センターで国内で建設された大半の海洋建築物の構造評定に関わりました。そこで得た建築工学では欠落している研究開発分野と他工学分野間の溝を科学的な手法で橋渡ししようと努めています。ロゴは研究目的の共有化とプレゼンスを高めるための研究室シンボルマークです。

現在の研究テーマは、①浮遊式人工基盤と上載建築物の流体構造系相互問題とした動的応答解析。②碎波帯に建設される海中展望塔の構造安全性に関する研究。③海底建築物の構造計画・解析法。④海洋構造物の実稼働モード解析による構造特性調査、です。

海洋建築物が出現し過酷な環境下で、建築物の耐用年限を超える30数年経過しています。近々巨大地震の来襲が予測されており、その対応に国をあげて取り組んでいますが、この海洋建築物は、重要度の低い状態に置かれています。現場からの構造データの収集を進め、これまでの理論的な解析と実現象の双方から吟味することにより、安全性評価に取り組み警鐘を鳴らしたいものと考えています。

連絡先◎日本大学理工学部海洋建築工学科船橋校舎13号館3階 047-469-5470 E-mail 西條 saiyo@ocean.cst.nihon-u.ac.jp



事務局だより

「桜建ふれあい2009」(21年度特別維持会員懇親会) & 第29回建築講座の報告

11月18日(水)18時より御茶ノ水の東京ガーデンパレスで、今年度の特別維持

支部報告／桜建彩の会

当会では、日本建築学会関東支部が主催して進めていた「アキニアリングデザイン展 in さいたま」に協力しています。この催しは、斎藤公男名誉教授が建築学会会長時に企画した展覧会の地方巡回版であり、全国9支部で開催しており関東

会員懇親会と第29回建築講座を同時開催した。また昨年同様「桜建ふれあい2009」と称して、賛助会員企業や個人会員からの作品をパネル展示し、前日本建築学会会長の斎藤公男氏や理工学部学部次長の井上勝夫氏からごあいさつを

いただいた。出席者97名の盛会となった。第29回建築講座は、東京建築士会専務理事の黒田清行氏を講師に迎え、「新しい建築土制度と、最近施行された関係法令について」をテーマに講演。80名近くの参加者が聴講した。

支部が最後になります。企画した斎藤先生は「桜建彩の会」会長、関東支部支部長が海洋建築工学科の新宮清志教授、実行責任者である埼玉支所長が「桜建彩の会」幹事をしている市川毅氏(元埼玉県庁)であることから「桜建彩の会」メンバーが中心的に活動に参加しています。この巡回展は、2009年12月11日か

ら20日までさいたま市の「埼玉会館」で開催され、世界の有名建築物の模型展示の他、ドームの組立、折り紙建築の展示・ワークショップなどを行いました。その他7月に財団法人建材試験センター中央試験所の見学会および同試験所に在職している卒業生との懇親会を開催しました。(幹事/飛坂基夫)

[e ラーニング資格講座] 開講のお知らせ

桜建会では、会員サービスの一環として、インターネットを利用した資格講座「e ラーニング資格講座」を開講しました。この e ラーニング資格講座は、いつでも、どこでも、何度でも学習できるインター

ネットを利用したビデオ講座です。近くに専門学校などがない、勤務時間も不規則で学校にも通いにくい会員の皆さまには、最適な学習システムです。講座内容は合格実績で定評のある「日建学院」が全国の学校で行っているものと同様のもので、桜門建築会の会員のために、特別な会員価格(約半額)で提供していただき

ました。いつからでも始められるので、ふるってご参加ください。
なお、本講座は桜建会会員以外は受講できませんので、必ず会員手続きを済ませて、お申し込みください。詳細については以下のサイトをご覧ください。
桜建会 [e ラーニング] 特設サイト
<http://www.okenkai-ex.jp/>

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名／卒業年／勤務先 (平成21年3月1日～11月20日) 10名

吉田典生 生産工-50 釣谷建築事務所
原 義晴 生産工-50 北斗システム
桐生昌道 生産工-60 桐生工務店
滝脇 徹 理工建-56 フジタ

野口悦宏 生産工-H7 芝工業
大塚文和 理工院-H3 日大短期大学部
湯浅次男 理工建-53 福田組
平松良洋 理工建-39 新環境設計

古橋 剛 他大学-53 日大理工学部
西本英司 生産工-47 長沼電業社

桜建会報 No.86 2009-December
発行人 片桐正夫
編集 桜門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会
委員長 横内憲久(理工学部建築学科)
副委員長 広田直行(生産工学部建築工学科)

委員 佐藤慎也(理工学部建築学科)
山本和清(理工学部海洋建築工学科)
塙川博義(生産工学部建築工学科)
サンジェイ・パリーカ(工学部建築学科)
羽入敏樹(短期大学部建設学科)
西山麻夕美(フリー編集者)
平野香奈子(千葉県庁)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室(2010年1月より)
TEL 03-3259-0649 FAX 03-3292-3216
E-mail kaii@okenkai.jp
ホームページ <http://www.okenkai.jp/>
専任/庄野弘子
非常勤/関根光枝、星野麻衣子
業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

トピックス○卒業生有志が『吉田鉄郎賞他事業基金』へ寄附

平成20年9月に新さつき会(※1)が解散した際に会費積立金の一部と同会所属の日本大学建築系卒業生の芳志とを合わせて、50万円を『吉田鉄郎賞他事業基金』(※2)に寄附いたしました。

ご承知のように吉田鉄郎先生(明治27年5月～昭和31年9月)は、木造建築に造詣が深く、日本建築の伝統を著作で世界に紹介するとともに、実作においてそれを現代建築に昇華することを追求しました。先生は大正8年に東京帝国大学を卒業後通信省営繕課に奉職し、東京

中央郵便局(昭和6年竣工)、大阪中央郵便局(昭和14年)など数々の郵便局舎等を設計しました。また、昭和21年5月に日本大学に着任し、通信省営繕で多くの実作に携わった経験と思想、建築に対する熱い想いは、戦後社会を担う若い学生たちに大きな影響を与え、直接に指導を受けた近江栄、小谷喬之助、小林美夫等の諸先生方がその後の日本大学設計計画系の教育の中枢を担うこととなりました。

『吉田鉄郎賞他事業基金』は、都市計

画の分野も含めた事業活動に、また、日本大学以外の事業活動にも活用が検討されていると伺っております。この度の寄附が優れた建築物や都市計画の創造にお役に立つことを念願しております。

桜門建築会会員/海老沼一夫

※1:新さつき会は通信省、郵政省(現、日本郵政)、電電公社(現、NTT)の建築部門に在籍および在籍経験者の親睦会

※2:桜門建築会には「吉田鉄郎の賞他事業の支援金として」平成20年9月に寄附し、本年3月の桜建会の理事会で「吉田鉄郎賞他事業基金」の設置が承認された。



左は図面を描く吉田鉄郎。右は東京中央郵便局。「吉田鉄郎建築作品集(昭和43年東海大学出版会刊行)から転載



学部ニュース



建築学科トピックス

◎今村研 M1 の夏目将平君は、「浮島美術館は泳ぐ～建物を泳がせるという手法による日本の港空間の再生～」が、「第18回 JIA 東京都学生卒業設計コンクール」(主催/日本建築家協会関東甲信越支部)で金賞を受賞した。都内各大学の卒業設計上位者のみが出品できるコンクールであり、桜建賞受賞の同作品が、55点の応募から最優秀賞に選ばれた。

◎松田佳那さん(今村研 M1)、原友里恵さん、藤井さゆりさん(佐藤慎也研 M1)、真砂遙さん(本杉研 M1)、森實幸子さん(山中研 M1)の「1RK」が、「地球に優しい住生活デザインコンペティション優秀賞」(主催/小国町森林組合他)を受賞した。

優秀賞とクリナップ賞を同時受賞した。(表紙写真有) また、田村圭祐君(本杉研 M2)、岩木友佑君、林高平君(同 M1)

の「ろ過する住宅」がINAX賞、居波宏和君(横河研 M2)、的場弘之君、渡辺貴通君(同 M1)の「ロ|炉」が東京ガス賞を受賞した。

◎中野直樹君(不動産・都市計画研 M1)の卒業論文「町屋再生施設が住民の意識・活動に及ぼす影響に関する研究 加賀市大望寺地区における町屋再生事業を対象として」が、2009年度日本建築学会の優秀卒業論文賞を受賞した。

◎井上峰一君、小野志門君(佐藤光彦研 M2)、田中麻未也君(同 4年)の「林と森」が、「21世紀の小国の家滞在コンペティション優秀賞」(主催/小国町森林組合他)を受賞した。

◎岩木友佑君の「街を憩う公園」が、「第

3回芸術センター記念コンペティション」(主催/芸術センター顕彰委員会他)に入選した。

◎八藤後猛研究室が、日本大学、TOTOと共同で「第3回キッズデザイン賞」(主催/キッズデザイン協議会)のリサーチ部門賞を受賞した。「子どもの発達に合わせた適切なトイレ環境の研究」による成果が評価された。

◎佐脇三乃里さん、藤井さゆりさん(佐藤慎也研 M1)、佐藤慎也助教連名の「+1人/日」が、2009年度日本建築学会デザイン発表会テーマ部門「住むところ都市あるいは反都市」で、講評者の植田実氏により、優秀な発表として顕彰された。

◎片桐正夫元教授が、日本大学名誉教授の称号を授与された。

◎柳田武専任講師が8月8日で退職されました。永い間ありがとうございました。

生産工トピックス

◎広田研究室M2の加藤尚裕君は、全日本学生建築コンソーシアム(JACS)2009住宅設計コンペ(テーマ／「50年デザイン住宅～50年後の未来にも支持されるデザイン～」)で、タイトル「活動のカベと小さなコシツ～50年デザイン住宅、領域の変化に住む～」が最優秀賞を受賞した。(表紙写真有)

◎曾根研究室M2の小林麻梨菜さんは共同で、「代官山インスタレーション2009」に作品タイトル「代官山ローム層」を出品し、審査員特別賞を受賞。これは「都市というものは大地に根ざしたものである。私たちはそれを忘れていないだろうか。都市の地下に地層を出現させそれを



川岸研究室チームの「ともに生きる・活きる暮らし」の模型

問う」と提案したインスタレーション。

◎川岸梅和教授を代表とする川岸研究室チーム(北野幸樹専任講師、杉本弘文(PD)、鈴木勝(M1)、野田りさ(M2))は、第11回提案競技「美しくまちをつくる、むらをつくる(主催／日本建築学会関東支部)で、優秀賞を受賞した。作品タイトルは、「共に生きる・活きる暮らし」。

◎笠井芳夫名誉教授(1998年4月定年)は、2009年度秋の叙勲で瑞宝中綬賞を賜った。

◎湯浅昇准教授は2009年5月に、「下地コンクリートの品質が建築仕上材の不具合に及ぼす影響に関する研究」で、09年度建築仕上学会賞(論文賞)を受賞した。

短大トピックス

◎小石川正男短大教授、高田康史短大副手、横村隆子短大非常勤講師のグループ作品「時代を装う食彩蔵－時をつむぐアルミ万華鏡－」が、SUSアルミ共生建築コンペ(主催／SUS株式会社)で優秀賞を受賞した。「アルミと“蔵”」をテーマに環境循環型素材であるアルミニウムと、日本古来の建築様式である“蔵”とが相互に利益を有しながら共生する(相利共生建築)次世代社会の建築空間デザインを求めた。

理工 海洋建築工学科トピックス

◎岡田研究室M1の朽木健二君は、「美しくまちをつくる、むらをつくる～住んでみたい、行ってみたい江東区・東京湾岸のまちづくり」というテーマの日本建築学会関東支部第11回提案競技で、最優秀賞を受賞した。提案内容は、江東区木場の貯木場の再生に向けて、木材産業従事者をはじめとする地域住民のさまざまなニーズに応じて多様な機能を搭載するフローティング施設をつくった。そのユニークさやアリティ・妥当性などが高く評価された。(表紙写真有)



小林麻梨菜さんが共同で制作した「代官山ローム層」

工トピックス

◎10月17日、せんだいメディアテークで開催した日本建築家協会(JIA)主催第13回東北建築学生賞で、15校16学科応募総数38作品中、早川真介君(4年生・浦部研)の作品「なかまちファーム」が優秀賞、松井岬さん(3年生)の作品「無限竹探物語」が特別賞を受賞した。また、同日同じ場所で開催した日本建築家協会(JIA)主催卒業設計コンクール東北支部で、7校の応募作品中、志村岳洋君(M1・狩野研)の作品「ちょっとそこまで。」が選抜され全国大会に出品された。

◎10月25日、金沢学院大学で開催した日本インテリア学会第16回卒業設計展で、

卒業生の美濃孝君(土方研卒)の作品「にじむ生活／生まれる家族」が優秀作品賞を受賞した。

◎土方准教授は10月27日、海峡メッセ下関(山口県)で開催した第56回全国建築審査会長会議で、建築行政への業績に対して表彰された。

◎浦部研4年の石賀悠也君は、「50年住宅デザイン～50年後の未来にも支持されるデザイン～」(主催／JACS全国学生建築コンソーシアム(2009))で「暮らす丘」が優秀賞を受賞した。

◎浦部研4年の早川真介君は、第13回東北建築学生賞(主催日本建築家協会東北支部)で「大切な歴史を日常の風景へ－公会堂と市民プラザ－」が優秀賞を受賞。

早川君は最優秀賞を受賞した昨年に続き2年連続の受賞となった。(表紙写真有)

◎建築設備を担当した八町雅康先生が今年度前期で定年退職しました。八町先生は昭和42年に着任以来40年余にわたり工学部の教育にご尽力いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

石賀悠也君の「暮らす丘」の模型

